

## 日蓮教學上に於ける御義口傳の地位

### 執行海秀

御義口傳は就註法華經御義口傳の略稱であつて、また日興記とも稱せられてゐる。本書は日蓮聖人が直弟の六老僧のため建治年中（1275-1277）、身延山に於て三部十卷の註法華經の要文に就て講述せられたもので、六老の一人であつた日興がその講述を筆録し、弘安元年一月元旦、聖人の檢閲印可を得たものと傳へられてゐる。

もし果してさうであるとするれば、本書はたとひ日興の執筆に係るものであるとしても、聖人の直説として日蓮教學上に於ては他の述作類と何等異なることなく、同等の地位に置かるべきであらう。

もつとも弟子の筆受類といふことになると、同聽異聞とか、また執筆者自身の主觀に依る曲解、またはそれ自身の思想的反映等の恐れがないではない。然し本書はそれらの批難を避けるため、聖人の檢閲印可と、六老僧の連判が加へられてゐるので、この點問題とならない、然も本書の對告及び講述年代より見れば、六上足を對告とするのであつて、一機一緣のための一般の消息類と趣きを異にし、聖人の圓熟したる晩年の法華經觀を直ちに口授せられたものである。

故にこのやうな觀點からすれば、本書は日蓮教學上根本聖典とされてゐる開目・本尊爾鈔よりも、寧ろ上位に置くべきであらうと思は

れる。

ここに於てか、清水梁山氏の如きは本書を以て「宛も釋尊の神力品と同一、一字一辭も皆本佛結要の妙句ならざるはなきなり」といひ、また田中智學氏も「御義口傳の講談は六上足の爲に特に本化直授の秘奧を開示し、六師に因せて末法は一切衆生に宣説し給ふところ、猶本佛の六萬浪沙に因りて此の直法を末法に遺留し給ひしに符合す、されば此の聖訣の妙判こそ眞の本化の面目にして、他の本尊鈔・開目鈔・安國論等の要典に於け唯一の解釋指南なり。」と論じてゐる。

かくして本書の地位は高度に評價され、御義口傳中心の教學の高揚せられ來つたが、かゝる潮流に對して、本書を第二次的に、または補助的に取扱はんとする潮流がある。即ち永昌日鑑は本書を評して「取捨情によるべし……蓋し用ひて録内の御義を助顯せんは可なり。」といひ、清水龍山氏は「宗義を學ぶ須く五大章疏を規準とすべし、御義口傳の如き先哲尙輒く講せず、況や初心をや。」と論じてゐる。かやうに本書の地位については兩様の見解が對立してゐるのであるが、こゝに問題となるのは、本書は果して從來の所傳の如く一字一句悉く日蓮聖人の妙句であり、口傳であるか否かといふ點に存するのである。

#### 二

本書の組織は一に首題に就ての口傳、二に法華經二十八品並に開結二經合して二百三十一箇の大事の口傳、三に品々別傳、四に二十八品悉く首題の事、の四部より成り、法華經を廣略要の三段の形式で口傳してゐる。思ふに聖人が門弟諸子のため折に觸れて法華經を講述せられたことも幾度かあつたことであらう。そしてその講述は

その都度、門弟諸氏によつて私的に備忘録として筆録され、或は正式に筆受せられたであらうことも推定に難くない。

今日、聖人の法華經講述を筆録したものと傳へられるものに、本書の外、更に日向の記として御講聞書が現存してゐる。講述年代は共に身延時代であるが、御義口傳が建治年中なるに對して、御講聞書は御義口傳講述の終了直後の弘安元年三月より同三年九月に亘る講述の筆録となつてゐる。従つて兩者はいはゞ姉妹關係にあるが、思想的內容の面から見れば、後期の御講聞書の方が寧ろ素朴的である。また形式的には御義口傳が専ら口傳的なるに對して、御講聞書は要文解釋にとゞまつてゐる。前者が富士日興の記なるに對し、後者は身延日向の記である。かやうに兩書は對蹠的關係をなしてゐるが、御義口傳の思想には、後世展開したる興門教學の思想的萌芽が見られるのであつて、このことは本書が興門教學の派祖と仰がれる日興の記と傳へられる點と關連して、問題が有するのではなからうかと思はれる。

そもそも本書は、觀心主義の思想を基調とするので、五百塵點を事顯本とし、この事顯本に對して無作三身の理顯本を如來神通之力の文に依て強調してゐる。無作三身の寶號を南無妙法蓮華經といふも、それは凡夫の當體本有の儘を指したものであり、また三千の諸法に名づけたものに他ならない。故に「萬法を無作三身と見るを如實知見といふ」といふのである。かくして十界諸法の理顯本を以て壽量品の極意とし、森羅萬家を自受用身の自體顯照と談ずるが本門の事圓であるといひ、久遠とはいはずつくろはざる有の儘の姿であると釋してゐる。

また題目について妙法蓮華經は「三種法華未分」であるといひ、

日蓮教學上に於ける御義口傳の地位(執行)

壽量品と雖も在世脫益なるが故に末法の要法に非ず、題目ばかり下種であると判じてある。これは種脫判を言明したものではないが、その根底に種脫判の思想が流れてゐると見るべきであらう。こゝに於て妙法蓮華經の題目は、既に行善薩に付囑され終つたが故に釋尊の妙法に非ずといひ、また開佛知見の文は日蓮出世の本懷であるとし、更に日蓮に依て得脱するといふのである。かやうに考察し來れば、本書の思想は興門教學に相通するものがある。

### 三

ところで本書は古來より眞偽の論がある。聖人門下初期の古記録を初めとして、聖人滅後百二・三十年の頃編輯された録内遺文にも漏れて居り、また聖人滅後百八十年の頃に出來た八品目隆の本門弘經抄にも周知せられないものであつて、その後や、降つて聖人滅後二百年頃完成された圓明日澄の法華啓運鈔に至つて初めて引用せられてゐるところである。古寫本には聖人滅後百五十七年の天文八年(一五三九年)の奥書を有する隆門の日經本があるに過ぎない。かやうに本書の傳承については根據が明瞭でない憾みがある。のみならず本書には、日蓮聖人滅後十三年、元の元貞元年に成立した徐氏の科註が引用されてゐるが如き、また本書の口傳形態や文體が、南北朝の頃出來た等海口傳等に類似する點から見て本書の成立は聖人滅後のものと思はれる。かゝる意味に於て、本書は思想的にも文獻的にも、日蓮教學上に於ける第一資料とすることに躊躇せざるを得ないのである。